

日本のオペラ 2022

石田麻子

1. 2022 年はどんな年だったのか

1-1. 2020 年から続くコロナ禍と紛争のはじまり

2022 年の公演は、データの上でも、また実感としても、オペラ上演活動がコロナ禍前の状況に戻りつつあったと感じられなくはない。ところが詳しく公演記録を見ていくと、あらゆる場面でコロナ禍の影響が続いていたことがわかる。グローバル化の一途をたどってきた総合舞台芸術だからこそ、移動や空間の共有を制限するコロナ禍は、引き続き影響を与えていきそうだ。

コロナ禍までに日本のオペラ界でのグローバル化を如実に示していたのは、歌手の配役や指揮者、演出家の起用などにおいてであろう。大規模な公演や企画性の高い公演では、主要な役柄、指揮者や演出家、舞台美術家、照明家などを、海外から招いて公演制作する手法が長年続いてきた。ところが、コロナ禍によって厳しい入国制限が課されてキャストや指揮者の変更が相次ぎ、プロダクションの制作側が対応に追われる事態が 2022 年も続いた。海外在住アーティストの来日がかなわないことから、公演を延期するケースも出たし、キャストや舞台のスタッフにコロナの陽性者や濃厚接触者が出たりして、稽古スケジュールの変更も数多く起きた。稽古開始前や最中に発表されるキャスト交代は日常茶飯事とも言え、公演当日に突然対応を迫られるケースも頻発した。また依然として観客の入場率を 50% に制限、市松模様で配席する厳しい措置をとるものもあった。

2022 年は海外から団体も個人も入れない状況から段階的な緩和措置がとられていく中で、国内団体の活動は先行して、国内在住の人材

を起用した大小規模の多様な上演により公演数が回復していき、数の上では復活の兆しを見せた。結果として、日本でオペラをつくるとはどういうことかと提示するような、体制づくりと内容が生まれたと言えるだろう。

日本のオペラ公演を特徴づけてきた招聘オペラも途絶えていて、「拠点型」「巡回型」の公演のいずれも開催されない年が続いたが、2022 年には少しずつ実施されるようになった。こうして、舞台芸術界が、コロナ禍対応の 3 年目に入ったとも言える。

さらにもう一つ、世界情勢に大きな影響を与える事象が勃発した。2 月 24 日に始まったロシアによるウクライナ侵攻である。ウクライナでは、連日の戦闘や爆撃のため、多くの死傷者を出しているという衝撃的な事実を、現地からの映像を通じて世界中が目の当たりにして、打ちのめされることになる。ウクライナ出身のバレエダンサーやオーケストラの団員などが戦場で命を落とすという痛ましいニュースにも接してきた。新国立劇場の開場 25 周年を記念する公演として企画された《ボリス・ゴドゥノフ》は、共同制作予定だった相手先歌劇場での、侵攻に伴う大きな調整事項を理由に、日本での制作となり、プレミエの幕を開けることになった。プロダクションに対するこうした大きな変更に加えて、侵攻側の国をルーツとするアーティストの降板もあった。加えて、航路制限や航空運賃、光熱費の高騰といった目に見える影響も加わって、海外招聘の人材や海外プロダクションなど、大規模なオペラ公演の開催に困難さが増していると言えそうだ。

そうした中で、国内各地の大小規模の団体

や統括団体に対する、実演芸術活動への公的資金での緊急支援が、2022年も引き続きおこなわれた。それら国や自治体による複数の支援事業をきっかけに、社会に出たばかりでコロナ禍に遭遇した若い人たちが、活動の機会を得ているケースが見受けられた。そうした時限的な支援措置とそれに伴う動きについては、風化しないうちに整理しておく必要があるだろう。

また、2020年、2021年に計画されながら、コロナ禍のために上演できず、延期となっていた公演が多数実施されたことも2022年の特徴だった。本稿では、それらも含めた状況を、時間を追って振り返りながらまとめてみたい。

1-2. 2022年1月～3月

この時期は例年、各団体が大規模公演をおこなって、年度の総決算となるような公演が目白押しとなる。2022年は、各組織がコロナ発症者、濃厚接触者などへの対応を余儀なくされながらも、大型公演がコロナ禍前と同様の規模で開催されるようになった。

東京二期会は、2022年5月25日時点で2,700名を超す声楽会員を擁する、我が国最大のオペラ団体である(同会のウェブサイトによる)。その東京二期会が、2月に予定していた「二期会創立70周年記念公演」でのボン歌劇場との共同制作《影のない女》の上演を延期した(同会ウェブサイト、2021年12月22日発表)。発表によると「演出家、指揮者、ドラマトゥルク、舞台美術デザイナー、照明デザイナーが12月上旬には来日を予定し、待機期間の後、長期に渡る準備を行う段取り」だったが、入国禁止措置が継続されていて延長が不可避となり、関係者協議のうえ延期を決定したとのことだ。そのため、上演実績のある宮本亜門演出による《フィガロの結婚》を急遽代替上演することになった。

日本オペラ振興会は、2023年10月の時点で約1,100人の声楽家たちが所属する組織で、2つの事業部門から構成されている、我が国最大規模のオペラ団体の一つである。

事業部門のうちの1つ藤原歌劇団は、1月に「2022都民芸術フェスティバル参加公演」として、《イル・トロヴァトーレ》を東京文化会館で、さらに愛知県芸術劇場でも上演している。3月には、ヴァッカーイ作曲《ジュリエッタとロメオ》(セミ・ステージ形式)を上演した。特に《ジュリエッタとロメオ》は、藤原歌劇団が「ベルカントオペラフェスティバル イン ジャパン 2021」と題して、イタリア南部の街マルティーナ・フランカにあるヴァッレ・ディトリア音楽祭と提携して取り上げた日本初演作品である。同音楽祭は、本拠地で長年ベルカント作品に取り組んで、特徴のある活動が続けている。2022年には、複数のオーケストラ、音楽祭、団体により、演奏会形式で優れた公演が多数開催されたが、この公演はその代表格だったと言ってもよいだろう。

同じく日本オペラ振興会の事業部門の一つである日本オペラ協会は、《ミスター・シンデレラ》を、「2022都民芸術フェスティバル参加公演 日本オペラ協会公演 日本オペラシリーズNo.83」として2月に上演した。

コロナ禍への対応をおこないながら、**新国立劇場**が上演を重ねた。

1～2月の《さまよえるオランダ人》は、ゼンタ、エリック、オランダ人の3役が、予定されていた海外キャストから、田崎尚美、城宏憲、河野鉄平の日本人歌手に変更となり、指揮者もガエタノ・デスピノーサがジェームズ・コンロンの代役を務めた。ほかのキャストのうち山下牧子が事情により後半の2日間出演できなくなったため、金子美香が歌唱の代役を務め、再演演出担当の澤田康子が舞台上での演技を分担担当するという緊急措置が

取られた。2月の《愛の妙薬》でも、指揮は引き続いてガエタノ・デスピノーサが代役を務め、アディーナ、ネモリーノ、バルコレ、ドゥルカマラーの主要4役は、砂川涼子、中井亮一、大西宇宙、久保田真澄の日本人歌手が、招聘予定だった海外歌手たちの代わりに出演している。

3月の《椿姫》はウクライナ出身の指揮者アンドリー・ユルケヴィチをはじめ、予定されていた海外招聘者が無事登場した公演となった。しかし、公演直前にウクライナ侵攻が始まったことを受けて、公演期間中に劇場がメッセージの発信をするとともに募金活動をおこない、ユルケヴィチ指揮で新国立劇場合唱団有志によるウクライナ国歌の動画を公開するなど、いち早く侵攻に対する意思を表明している。

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールは、1月に沼尻竜典作曲の《竹取物語》を上演、さらに3月は、沼尻が継続してきた「びわ湖ホールプロデュースオペラ」のワーグナーシリーズで、《パルジファル》をセミ・ステージ形式で取り上げた。沼尻は2007年から務めた芸術監督の任期を2023年3月で終えている。

関西二期会が、3月に《ドン・ジョヴァンニ》を、ドイツ・ドルトムント市立劇場第1指揮者、音楽総監督代理を務める小林資典^{もとのり}の指揮で上演した。この公演は、本来は2020年10月に予定されていたものだ。9月には、瀬山智博指揮で同プロダクションを、文化庁「統括団体によるアートキャラバン事業2022 グランドオペラフェスティバル in Japan」により、鹿児島県の宝山ホールで上演している。

小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトXⅧは、《こうもり》をディエゴ・マテウス指揮により、ロームシアター京都、東京文化会館、よこすか芸術劇場で3月に上演した。この公演もまた、2020年3月にクリスチャン・

アルミンクと小澤征爾の指揮で公演することが予定されていたものだった。

またこの時期、各地の劇場や団体間の共同制作が複数おこなわれた。

東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 / 刈谷市総合文化センター(指定管理者:KCSN 共同事業体) / 熊本県立劇場 / ザ・オペラ・バンド / 刈谷市総合文化センター管弦楽団 / 九州交響楽団の全国共同制作により、岡田利規演出の《夕鶴》が2021年に引き続き上演された。会場は愛知県の刈谷市総合文化センターと熊本県立劇場の2か所だった。兵庫県立芸術文化センターが、「関西元気文化圏参加事業 日本オペラプロジェクト2022」と題して、3月に《夕鶴》を岩田達宗演出で上演した。4月には東大阪市文化創造館との共催事業で同じプロダクションを上演している。このほか「全国共同制作オペラ 鈴木大拙・西田幾多郎生誕150年記念」の渡辺俊幸作曲《禅〜ZEN〜》が、高崎財団 / 金沢芸術創造財団 / 石川県音楽文化振興事業団の制作により、1月に金沢歌劇座、2月に高崎芸術劇場で上演された。この時の指揮者も、入国制限措置に伴い、ヘンリク・シェーファーから鈴木恵里奈に変更されている。

1-3. 4月～8月

藤原歌劇団は、例年4月から5月の連休にかけて毎年川崎市麻生区でおこなわれる「川崎・しんゆり芸術祭 アルテリッカしんゆり」で、《イル・カンピエッロ》を上演した。7月には「藤原歌劇団・NISSAY OPERA 2022」で《コジ・ファン・トゥッテ》を日生劇場で、同月には岩手県の奥州市文化会館30周年記念事業として《トスカ》を上演している。東京二期会は、同じく7月にフランス国立ラン歌劇場との共同制作として、宮本亜門演出による《パルジファル》を上演した。ラン歌劇場の故エヴァ・クライニッツ総裁と企画して

いたもので、文字通り同劇場との国際共同で作上げた舞台だった。同公演では、出演予定だった長谷川顯が体調不良により降板、公演直前の7月11日に逝去した。このほか、4月に《エドガール》をセミ・ステージ形式で上演、指揮はアンドレア・パッティストーニだった。

新国立劇場は、4月に《ばらの騎士》と《魔笛》を上演して、劇場のレパートリーを確かなものにした。ただし《ばらの騎士》は、オックス男爵を妻屋秀和、オクタヴィアンを小林由佳へとキャスト変更するなどの措置がとられている。さらに5月には、《オルフェオとエウリディーチェ》を新制作した。鈴木優人指揮、勅使川原三郎演出により、現代におけるバロック・オペラ上演での、表現の可能性の幅広さを再確認する舞台となった。7月には、大野和士指揮、ケイティ・ミッチェル演出により《ペレアスとメリザンド》を新制作上演した。この舞台も、一部の日程でキャスト変更があった。さらに同じ7月に《蝶々夫人》を「新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室2022」で上演している。

日生劇場は《セビリアの理髪師》を「ニッセイ名作シリーズ2022」「NISSAY OPERA 2022」として沼尻竜典指揮、栗國淳演出で上演、その後11月から12月にかけて、びわ湖ホール、フェニーチェ堺、やまぎん県民ホールで巡回公演している。**びわ湖ホール**は、コロナ禍において、声楽アンサンブルの存在が活かされた。前出のワーグナーシリーズとは方向性の違う企画として、7月に《ファルスタッフ》がとりあげられ、声楽アンサンブルのメンバーがキャスティングされた。田口道子演出による。同じく7月に、**兵庫県立芸術文化センター**が「佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ2022」として、《ラ・ボエーム》を取り上げ、コロナ禍後止まっていた海外からの演出家や歌手の招聘を本格的に再開した

(2021年版オペラ年鑑での同センターへのインタビューによると、前2021年の《メリー・ウィドウ》はオール・日本人キャストで、舞台装置家とオーケストラのゲストプレーヤー2名を海外から招聘)。同プロダクションは2020年に開館15周年記念事業として計画されていたが、新型コロナウイルス感染拡大により延期となり、約2年を経て実施されたものである。**JMS アステールプラザ**で8月におこなわれた**ひろしまオペラ・音楽推進委員会**による《ドン・ジョヴァンニ》も2020年、2021年と予定されていた公演が延期となり、ようやく実現したプロダクションだった。

北九州シティオペラは、イタリアのトリエステ・ヴェルディ歌劇場との共同制作として、《ラ・ボエーム》を5月に上演した。これも、2021年に上演予定だった舞台がコロナ禍で延期され、改めて指揮者、演出家、複数のソリストを招いて実施したもので、民間レベルの交流が再開した事例である。

1-4. 9月～12月

藤原歌劇団は、《蝶々夫人》を文化庁「統括団体によるアートキャラバン事業 2022 グランドオペラフェスティバル in Japan」で9月と11月に上演し、《助けて、助けて、宇宙人がやって来た！》を、文化庁「文化芸術による子供育成推進事業—巡回公演事業—」〈音楽劇公演〉で11～12月に公演している。藤原歌劇団が長年上演し続けている《蝶々夫人》は、栗國安彦演出の決定版とも言えるような大型の演出舞台である。一方、《助けて、助けて、宇宙人がやって来た！》は、子供にも親しみやすい物語による小規模な楽しい舞台であり、まったく異なる性格の2つの舞台を、国内の各地域に広く届けた。**日本オペラ協会**は、宇吹萌^{うすい めい}台本、竹内一樹作曲《咲く～もう一度、生まれ変わるために》を舞台初演。昭和音楽大学主催によるプロジェクトの

最終的な成果である。同プロジェクトは若手の台本作家と、同じく若手作曲家のマッチングの後に、様々なワークショップを経て作品が創作され、まさにコロナ禍が始まった2020年2月には、演奏会形式で上演していたものだ。メイン・ファシリテータの一人だった郡愛子総監督のもと、結果として4年以上の月日をかけて、ようやく舞台上演に漕ぎつけ、同じくワークショップのメイン・ファシリテータの一人だった齊藤理恵子の演出により、ドラマを見事にまとめあげた。

東京二期会は、9月に栗山昌良演出の《蝶々夫人》を新国立劇場で上演した。これが、2023年に亡くなった栗山による最後の演出作品となった(生前のインタビューを本年鑑に掲載)。さらに、2月に東京文化会館で上演した《フィガロの結婚》を、文化庁「統括団体によるアートキャラバン事業 2022 グランドオペラフェスティバル in Japan」と題して、10月に鳥取、大分の各県で上演している。10~11月には、もう一つ生田みゆき演出による《雪の女王》の巡回公演もおこなっている。同公演は、東京都教育庁主催の「子供を笑顔にするプロジェクト」事業により都内複数の小学校体育館で実施されたものだ。11月には、恒例の日生劇場での公演で、原田慶太楼指揮、鶴山仁演出で《天国と地獄》がとりあげられた。歌唱部分の字幕付き、日本語による上演だった。

新国立劇場は、10月に2022/2023シーズンの幕を開け、新制作の《ジュリオ・チェーザレ》を上演した。このプロダクションは、2020年4月に予定されていたながら、コロナ禍により上演が延期されていたものである。ロラン・ペリー演出の舞台は、キャストも変更になって新たなスタートとなったが、バロック・オペラの魅力をソリスト達が生きいきと動きまわりながら表現して、音楽的にもリナルド・アレッサンドリーニ指揮、東京

フィルハーモニー交響楽団が支えた。11月には《ボリス・ゴドゥノフ》が新制作された。新国立劇場の開場25周年を祝う大きな公演企画である。このプロダクションは、ポーランド国立歌劇場との共同制作で、当初はワルシャワの同劇場で制作、初演の予定だった。ところが、2月のウクライナ侵攻の影響を直接受けて、公演延期になったことから、新国立劇場で制作、プロダクションの初演舞台を実施、来日するキャストも変わるという大きな変更のあった上演である。大野和士指揮、マリウス・トレリンスキ演出による舞台は、歴史的な題材が、社会で現実に行き起きている事実とも重なり、観る者たちに大きな問いを投げかけた。12月には《ドン・ジョヴァンニ》上演がおこなわれて、激動の2022年の幕を閉じた。

このほか、ロームシアター京都で《蝶々夫人》の公演が「高校生のためのオペラ鑑賞教室 2022」として、京都市、ロームシアター京都、新国立劇場の共同主催により、10月に実施された。

びわ湖ホール声楽アンサンブルは、10月から12月にかけて、《泣いた赤おに》を、文化庁「文化芸術による子供育成推進事業—巡回公演事業—」〈音楽劇公演〉の枠で、北信越、京都地域で公演した。さらに滋賀県内の小学校での鑑賞教室を開くなど、グループの規模に合った舞台で、機動力を発揮した。このほか、11月にびわ湖ホール声楽アンサンブル第76回定期公演として《ジャンニ・スキッキ》を演奏会形式で上演している。

東京文化会館が6月に《400歳のカストラート》を再演した。さらに9月に《子供と魔法》を、毎年開催している「東京文化会館オペラBOX」シリーズで、上野中央通り商店会と共催で実施、12月にオレーフィチュ作曲《シヨパン》を「シアター・デビュー・プログラム Music Program Tokyo」と題して小ホールで

上演、特徴のある活動を継続している。

各地の団体では、**北海道二期会**が《皇帝ティトの慈悲》を11月に、**関西二期会**が《リゴレット》を同月に上演している。

2. 特徴のある動き

2-1. 劇場人材への支援と育成機会の確保

コロナ禍で真っ先に影響を受けたのは、アーティストや技術スタッフたちだった。彼らに対する国や自治体の支援は、その役割と苦境を社会が認識したことで、大きく一歩を踏み出した。即効性を意図した金銭的な支援への要望に加えて、雇用が不安定な現場のスタッフやアーティストたちへの契約にかんする改善の必要性、さらに雇用リスクに起因する人材不足などがあぶりだされて、検討の焦点となったのだ。これらは、コロナ禍において、声をあげる人たちがいたことから可視化されたリスクである。文化庁が「文化芸術分野の適正な契約関係構築に向けた検討会議」での検討を経て、「文化芸術分野の適正な契約関係構築に向けたガイドライン（検討のまとめ）」を2022年7月27日に発表し、さらに相談窓口の設置などに助成をおこなうなど、一定の効果があったと言えそうだ。

一方、これからデビューするタイミングにある若い歌手などのアーティストや、劇場人材として入職していくはずの技術スタッフ、アートマネジメント人材に、確かな未来を示せているのかという点も意識したい。このように、今後の舞台芸術界の展開を左右する重要な問題が浮かび上がっている。

そうした中でやはり彼らを育てる機会や場を提供するのは、大学などの高等教育機関であり、卒業後に所属する劇場付属研修所やオペラ団体の育成機関である。さらに、若手アーティストを期限付きで雇用する劇場付属アンサンブルなどの存在はアーティストとしてのキャリアを積むための大きな支えとなる。

そうした機関の実施する大小規模の公演は、コロナ禍で歩みを止めざるを得ない状況が続いていたが、本来の役割を取り戻すべく各組織が努力をした結果、2022年はそれらの活動がほぼ再開されたと言ってもよいであろう。

2-2. 海外招聘公演

まだ本格的には海外招聘公演は戻ってきているとは言えないものの、2022年は「巡回型公演」がハンガリー国立歌劇場《魔笛》により実現した。10月から11月にかけておこなわれた計12回の公演は、連日会場を移動する、いわゆる「乗り打ち」公演として実施された。ヘンデルの《シッラ》は、ヴァイオリンのファビオ・ビオンディが率いるエウローパ・ガランテが来日して、**神奈川県立音楽堂**の制作で日本初演した。2020年2～3月に予定されていたこの公演が直前で中止となった経緯は、本年鑑2020にも記述している。ゲネプロを実施するまでの状況になっていたにもかかわらず、中止措置がとられたことは記憶に新しい。

2022年は、まだ1つの歌劇場と1つのグループだけの来日だったが、引き続き、各地域の中核となる会場でオペラ公演を供給する役割として、我が国における公演供給の一翼を担う公演形態だと言えそうだ。

2-3. 各地域の市民オペラなどの活動

団体名に、市民、県民、町民を冠した活動のみならず、県、市などの活動する地域名を付した団体が活動を再開し始めたことが、2022年の特徴となっている。市民オペラの定義や考察は別の機会におこなうことにして、大規模な会場での公演や特徴のある公演など、いくつかの活動を取り上げてみよう。

まつもと市民オペラが1月に信長貴富作曲《山と海猫》を委嘱・世界初演した（第20回佐川吉男音楽賞奨励賞）。同公演は、2020年

12月に初演が予定されていたが、コロナ禍対応のために延期せざるを得ず、改めて上演にこぎつけたものだ。伊丹市民オペラは、同じく1月に開催した《アイダ》の上演が、2019年以来3年ぶりのものとなり、チケットも完売した。2月に芦屋市民オペラが《天国と地獄》、同月に長崎県オペラ協会がロッセリーニ作曲の《花言葉～老嬢ドニャ・ロシータ～》を上演した。

藤沢市民オペラ《ナブッコ》は2月24日に開始されたウクライナ侵攻の直後、2月26、27日、3月5、6日におこなわれた。これも2021年から延期されていた公演だ。この時はまだ1席ずつ空けて配席していたが、4公演中3公演が完売、1公演もほぼ売り切れという中でおこなわれた。このほか、藤沢市民オペラは3年を1シーズンと定めて、初年度にプロのオペラ団体などのプロダクションを招聘、芸術監督の園田隆一郎が指揮をする公演をおこなっており、この年は11月に《ラ・ボエーム》を取り上げた。このプロダクションは日生劇場で制作・上演されたもので、その時は日本語での舞台上演だったのを、今回はイタリア語上演に変更して実施された。

西日本オペラ協会「コンセル・ピエール」は3月に松井和彦の《泣いた赤鬼》、8月に《花咲かじいさん》、鹿児島オペラ協会は3月に《ミスター・シンデレラ》を上演、4月に武蔵村山市民オペラが《椿姫》を実施した。

小田原オペラが1月に《こうもり》と11月に《愛の妙薬》を、5月には小千谷市民オペラが《カルメン》を上演した。このうち、小千谷市民オペラは小千谷闘牛場で、小田原オペラは、小田原三の丸ホールと南足柄市文化会館で開催しており、地域の資源を活かした会場選びに特徴がみられた。

5月には前橋・市民オペラ合唱団が《カヴァレリア・ルスティカーナ》、同月に埼玉オペラ協会が《泥棒とオールドミス》、6月に栃木

県オペラ協会が《ジャンニ・スキッキ》、8月には鳥取オペラ協会／とりアートオペラ公演実行委員会が《ドン・ジョヴァンニ》を上演している。10月には調布市民オペラが第25回公演《カルメン》を、同じ月に弘前オペラが《こうもり》を、さらに綾瀬市民オペラ（制作：綾瀬でオペラを！の会）が《魔笛》を上演した。

11月には富山県オペラ協会が《カルメン》、同じく11月に四日市市民オペラ（制作：四日市市文化まちづくり財団／第11回四日市市民オペラ実行委員会）が《ラ・ボエーム》を上演した。

日本の創作オペラも数多く上演された。8月に四街道市民オペラが安藤由布樹作曲《被爆はまゆう物語》を、11月には市民合唱団の参加のもと、中村透作曲《御柱》をカノラホール（おかや文化振興事業団）が上演した。6年に1度（数え年の表記では6年あけて「7年ごとの開催」と表記されることが多い）、申と寅の年に長野県諏訪地方で執りおこなわれる御柱祭の開催年に上演されてきた作品である。12月に伊豆市民オペラが、朝岡真木子作曲の《坦庵 熱き心の火》を上演している。同月に、埼玉県民オペラとして、オペラ彩が池辺晋一郎作曲《秩父晩鐘》を上演した。

この項ですべてを取り上げられているわけではないものの、各地の市民オペラ活動が、困難な時期を経て、少しずつ戻ってきた状況にあることが確認できる。各地域で長い間活動を続けてきた団体がコロナ禍を乗り越えて、その歩みを止めなかったことが心強い。

2-4. 演奏会形式など

例年にも増して、演奏会形式やコンサート形式に、優れた上演が多かったのではないだろうか。コロナ禍が続く中で選択肢となったというよりも、これまで積み上げてきた演奏力を、オペラ作品で存分に発揮する企画が選

扱われるようになったからなのかもしれない。

東京芸術劇場はコンサートホールの音響特性を生かして、コンサートオペラをシリーズ化しており、2022年は1月に《人間の声》に取り組んだ。フランス作品を得意とする佐藤正浩の指揮による上演である。濱田芳通指揮のアントネッロは、古楽演奏のスペシャリスト集団として、バロック・オペラ上演プロジェクト〈オペラ・フレスカ〉を立ち上げ、快進撃を続けている。2022年は3月に《ジュリオ・チェザレ》を取り上げた（第19回三菱UFJ信託音楽賞奨励賞）。**びわ湖ホール**は、先述のとおり、沼尻竜典指揮により自作の《竹取物語》と《パルジファル》をとりあげた。寺神戸亮とのコラボレーションが続く**北とびあ国際音楽祭**では、12月にリュリの《アルミード》が上演された。

愛知祝祭管弦楽団は、アマチュアの団体ながら継続的にワーグナー作品に取り組んでいる。2022年は8月に《トリスタンとイゾルデ》を三澤洋史の指揮により、演奏会形式で実施した。**東京オペラ・プロデュース**が7月に《ザネット》、8月に《仮面舞踏会》を演奏会形式でとりあげた。2020年2月28日の《シンデレラ》が無観客での上演対応となって以来である。

東京・春・音楽祭 2022は、マレク・ヤノフスキ指揮で3月に《ローエングリン》、ブリテン作曲の《ノアの洪水》を4月に加藤昌則指揮で、さらにピエール・ジョルジョ・モランディ指揮で、同じく4月に《トゥーランドット》を取り上げた。同音楽祭のオペラ公演は、演奏会形式ながら、海外の招聘キャストにより重量級の演目を並べており、海外招聘オペラの領域に分類できそうな内容である。

大阪国際フェスティバルにより、8月に演奏会形式で取り上げられた《泥棒かささぎ》は、コロナ禍で2021年6月に予定していた公演が延期となってから、満を持して上演に

漕ぎつけたものである。結果として非常に高い評価を得たのは、延期措置で一旦計画が中断されたことによって、演奏者たちの作品理解が進んだからだと言えるかもしれない。

プロフェッショナル・オーケストラの主催公演での成果を2つあげよう。**東京フィルハーモニー交響楽団**とチョン・ミョンフンによる10月の《ファルスタッフ》も、毎年このながらオーケストラとの息の合った演奏で大いに気を吐いた（第20回三菱UFJ信託音楽賞奨励賞）。**東京交響楽団**の11月の《サロメ》は、ジョナサン・ノットが指揮、演出監修をサー・トーマス・アレンが務め、タイトル・ロールに迎えたアスミク・グリゴリアンが圧倒的な歌唱を披露、堂々たる演奏を聴かせた。これらの公演は、今が旬の歌手をキャスティングして、日ごろの活動を通じて信頼関係を築いている指揮者とオーケストラとが共演することで、優れた成果を引き出した好例と言えるだろう。

3. 新たな創作の潮流

3-1. 新作初演

まず、大規模会場で実施された初演作品を取り上げよう。**渡辺俊幸**作曲《**禅～ZEN～**》は、1～2月に高崎財団/金沢芸術創造財団/石川県音楽文化振興事業団により、金沢、高崎の各都市で初演された。**寺嶋陸也**作曲《**少年少女恐竜記**》は、1月に栗友会によりサントリーホールで、**仙道作三**作曲の《**日蓮の宇宙 曼荼羅世界**》は8～9月に新国立劇場で上演された。

オペラシアターこんにゃく座による**寺嶋陸也**作曲《**あん**》は2月に創立50周年記念事業として俳優座劇場で上演されており、同団はこのほか9月に**信長貴富**作曲《**ルドルフとイッパイアッテナ**》もあうるすぽっとで新作上演した。プロジェクト方式で創作が進められた**竹内一樹**作曲《**咲く～もう一度、生まれ変わ**

るために〜》が日本オペラ協会によりとしま
区民センターで舞台上演、同じ宇吹萌台本作
品では、9月に室内オペラ《タマゴサンドの真
相》が加賀清孝作曲でリネットにより演奏会
形式にてムジカーザで上演されている。この
ほかにも多様な規模、形式による創作作品
が、多くの努力や支援を得て生み出された。

さらにこの年は先述の信長貴富作曲《山と
海猫》が、まつもと市民芸術館で、まつもと
市民オペラにより初演、安藤由布樹作曲《被
爆はまゆう物語》は四街道市民オペラが初演
している。このように、日本オペラの新作上
演において、市民オペラは大きな役割を果た
しており、日本語によるオペラ創作や上演に
おいて、親和性が見て取れる。

3-2. 日本初演

マスネ作曲《聖母の軽業師》を3月に札幌
室内歌劇場が日本初演した。藤原歌劇団が、
ヴァッカーイ作曲《ジュリエッタとロメオ》
を、ヘンデル作曲《シッラ》は、エウローパ・
ガランテを招聘して、神奈川県立音楽堂の制
作により日本初演した。このほか、リュリ作
曲《アルミード》を、北区文化振興財団が「北
とびあ国際音楽祭2022」で取り上げた。

日本初演ではないものの、グラス作曲の
《浜辺のアインシュタイン》が、オリジナル
バージョンで新制作され、10月に神奈川県
民ホールの50周年記念事業として上演され
た。同ホールの横に広い舞台面を活かした舞
台演出が特徴的で、キハラ良尚指揮、ヴァイ
オリンの辻彩名をはじめとするソリストたち
の完成度の高い演奏が舞台を支えていた。偶
然にも同作品は、同月に大阪のあいおいニッ
セイ同和損保ザ・フェニックスホールの主催
で、演奏会形式・抜粋版により取り上げられ
た。こちらの上演も、音楽監督・電子オルガ
ンの中川賢一をはじめとする奏者や歌手たち
の、高度な演奏技術とアンサンブルの完成度

が大いに話題になった。

初演作品の上演には、指定管理者制度のあ
る中で、準備に時間がかかり、集客面でリス
クがあることなど、様々な要因から取組みに
くくなっている可能性もありそうだが、そう
した環境下において、これらの上演が実現し
たことは特筆すべきだろう。

4. オペラ制作を取り巻く環境の変化

4-1. コロナ禍での継続支援の動き〜令和3年度補正 予算による事業実施

2022年は、国の令和3年度の補助事業、
および補正予算による事業に加えて、令和4
年度の本予算での補助事業などもあり、複数
の支援施策が同時に計画、実施されたことが
特徴である。

2022年に適用された支援策として、コロ
ナ禍で大きな打撃を受けた劇場・音楽堂や文
化芸術団体などに対して「統括団体」を通じ
て、大規模な事業が実施された。さらに、子
供の鑑賞機会確保という枠組みで、文化芸術
団体や劇場による公演への支援事業も複数実
施された。以下、オペラに対する補助例をあ
げてみよう。

1) 令和3年度補正予算 文化庁 統括団体によるアー トキャラバン事業

標記、「統括団体によるアートキャラバン
事業」が令和3年度の補正予算で実施された。
同事業の2つの枠組みのうち、大規模公演型
は12団体、地域連携型は1団体が採択され、
合計13団体に対する55億5千万円の大型助
成となった。このうちオペラ関連は、オペラ
キャラバン・ジャパン実行委員会と所属団体
の共催事業（東京二期会《フィガロの結婚》、
日本オペラ振興会《蝶々夫人》、関西二期会
《ドン・ジョヴァンニ》）、さらに日本芸能実
演家団体協議会の「JAPAN LIVE YELL
project」（まつもと市民オペラ実行委員会《山

と海猫》ほか)、日本劇団協議会の現代演劇キャラバン「全国の人に演劇を！多くの人に感動を！」(オペラシアターこんにゃく座《ネズミの涙》)が実施された。同事業は、各地で大規模な公演や地域の団体公演の実施を支援するため、コロナ禍をきっかけに実施された事業である。

オペラ関連では、上記により、長野県、長崎県、大分県などの館で大規模な公演がおこなわれて、地域の人々が熱心に鑑賞する様子が印象的であった。同事業により、各館でも久しぶりに大型のオペラ公演が実現したケースもあり、地域の鑑賞ニーズの確保に貢献する機会となったと言える。

2) 令和3年度補正予算文化庁ARTS for the future!2

ARTS for the future!2 (以下、AFF2) は、「文化芸術関係団体(法人を含む)において、感染対策を十分に実施した上で、積極的に公演などを開催し、活動の充実・発展を図る取組を支援」する事業として計画されたものである。令和3年度の補正予算では、AFF2と先の統括団体によるアートキャラバン事業をあわせて556億円と、文化庁の本予算の半分以上を超える金額が確保された。とりわけこのAFF2事業では、若手や地域の小規模な団体など、普段国の公的資金の助成を受ける機会がなかった活動にも補助されたことが大きな特徴となった。そのため2022年も前年に引き続き、比較的小規模な団体によるオペラ公演が各地で開催されたケースが見受けられ、大規模会場での公演が22回、とりわけ中・小規模会場での公演が62回記録された。同補助事業が、各地での活動を新たに援助するきっかけともなったと言える。

3) 令和3年度補正予算文化庁「子供のための文化芸術鑑賞・体験再興事業」ほか

コロナ禍での行動制限を受けている子供た

ちの鑑賞機会を確保するために、政府の大型施策が実施された。令和3年度補正予算「子供文化芸術活動支援事業(劇場・音楽堂等の子供鑑賞体験支援事業)」で、愛知県芸術劇場でのハンガリー国立歌劇場2022年日本公演が補助を受けた。同じく令和3年度補正予算の「子供のための文化芸術鑑賞・体験再興事業」では、オペラシアターこんにゃく座やオペレッタ劇団ともしび、東京合唱協会の巡回公演が対象となっている。

4) そのほか

令和4年度日本博主催・共催型プロジェクトとして、「新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室2022」の東京公演が開催されている。また、第39回国民文化祭 第24回全国障害者芸術・文化祭がおこなわれて、1月にスコラーズ岐阜による《花子》が上演されている。さらに11月に創作オペラ「貞奴」プロジェクトによる《ドラマチック木曾川—Opera 貞奴—》が演奏会形式で上演された(同作品はこのほか1月と8月にも公演実績がある)。

年度を遡るが令和2年度文化庁文化芸術振興費補助金「子供文化芸術活動支援事業(劇場・音楽堂等の子供鑑賞体験支援事業)」が、新国立劇場2月の《愛の妙薬》に対して補助された。

4-2. 令和4年度予算による補助事業の実施

1) オペラ団体への助成

文化庁文化芸術振興費補助金「舞台芸術創造活動活性化事業」は、日本芸術文化振興会をつうじて、各団体の活動への助成がおこなわれる。このうち、「複数年計画支援」を受けたオペラ団体は、東京二期会、日本オペラ振興会である。同枠で採択された団体は、最大3年間は同枠での助成が確保され、複数の事業を実施できる。これにより、安定した公演計画が可能になるとは言えるものの、毎年

申請、審査を受けることは変わりなく、助成金額も約束されているわけではない。しかし、2 団体の大規模な主催公演の多くは、同補助金を活用して実施されており、日本オペラ協会 / 日本オペラ振興会《ミスター・シンデレラ》《咲く〜もう一度、生まれ変わるために》などがこの枠組みを活用して公演実施された。一方「公演事業支援」には、一般枠とステップアップ枠とがあり、単年度かつ活動ごとの採択となる。びわ湖ホール声楽アンサンブル《ファルスタッフ》、関西歌劇団 / 関西芸術振興会《偽りの女庭師》、名古屋二期会《フィガロの結婚》、関西二期会《ドン・ジョヴァンニ》《リゴレット》などが同助成を受け実施された。

日本芸術文化振興会の**芸術文化振興基金助成事業**のうち、「現代舞台芸術創造普及活動」で、複数の公演が採択されている。例えば、藤沢市民オペラ《ナブッコ》《ラ・ボエーム》、アントネッロ《ジュリオ・チェーザレ》、ニッセイ文化振興財団《ランメルモールのルチア》、北海道二期会《皇帝ティトの慈悲》、オペラ彩《秩父晩鐘》などである。これら各地域で継続して大規模な公演を実施し続けている市民オペラのほか、アントネッロのようにバロック作品に専門性を発揮している団体もあり、我が国の幅広いオペラ上演活動を支えていることが特徴である。このほか「アマチュア等の文化団体活動」枠で助成を受けた団体の公演もあった。ちちぶオペラの《くるみ割り人形》は同枠での助成である。

上記は、文化庁補助金が日本芸術文化振興会を通じて、あるいは同振興会の基金により、各団体に配分された助成金である。

加えて文化庁の各事業から、オペラ公演に対して実施されたものをまとめてみよう。

文化庁委託事業「戦略的芸術文化創造推進事業」では、新国立劇場の《ボリス・ゴドゥノフ》、東京二期会の《パルジファル》の2つ

の大型公演に対して、さらに藤原歌劇団の《ジュリエッタとロメオ》(同公演は令和3年度分)に対して事業補助された。

このほかに、子供に対する公演助成は、先に取り上げた補正予算の枠での2つの補助事業に加えて、本予算でも補助事業が実施されている。文化庁「**文化芸術による子供育成推進事業—巡回公演事業—**」および同「**ユニバーサル事業—**」で、複数の団体による事業が〈音楽劇公演〉〈児童劇公演〉〈合唱公演〉〈ミュージカル公演〉などの分野で採択されている。この枠では、びわ湖ホール声楽アンサンブル、ミラマーレ・オペラ、東京合唱協会、オペレッタ劇団ともしび、オペラシアターこんにゃく座、藤原歌劇団、堺シティオペラ、東京二期会、アーツ・カンパニーにより、全国の小・中学校体育館などで巡回公演がおこなわれた。

2) 教育・研究機関への助成

文化庁「**大学における文化芸術推進事業**」では、昭和音楽大学が《フィガロの結婚》を上演した。アートマネジメント人材を育成するための助成事業で、公演制作の見学や座学などの機会が設けられた。実際に大型のオペラ公演を制作するための知識や体験を提供する機会となっている。

3) 劇場・音楽堂などへの助成

文化庁**文化芸術振興費補助金「劇場・音楽堂等機能強化推進事業」**は、日本芸術文化振興会をつうじて、各地域の中核となる各館の主催事業に対して配分されている。この事業には、4つの枠組みが設けられており、オペラ公演も採択されている。そのうち、**「劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業」**を活用して、びわ湖ホール、兵庫県立芸術文化センターなどが公演を実施した。加えて、**「共同制作支援事業」**では、《夕鶴》が熊本県立劇場

ほかで上演された。金沢歌劇座ほかでの《禅～ZEN～》もこの枠組みでの助成である。さらに、文化庁委託事業「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」で、新国立劇場オペラ研修所が《ドン・ジョヴァンニ》を上演している。

このほか、日本芸術文化振興会の「芸術文化振興基金助成事業」のうち、「地域文化施設公演・展示活動：文化会館公演」で、おかや文化振興事業団の《御柱》、伊丹市民オペラ公演実行委員会《アイダ》、みつなかオペラ実行委員会《コジ・ファン・トゥッテ～恋人たちの学校～》などの市民オペラが採択されている。伊丹市民オペラやみつなかオペラは例年同枠で申請、採択されてきており、地域の文化会館を運営する財団による市民オペラの継続性が担保されていることが見て取れる。

5. 2022年の日本のオペラ

コロナ禍が舞台で演じる者、作る者、観る者たちに引き続き大きな影響を与え続けてきた2022年は、停止した流れを再開しようという動きが強く働いた年だと言えるだろう。結果として、従前の活動状況に戻りつつある組織もあるものの、大規模な公演を実施する劇場や団体と、比較的小規模な公演をかける声楽家グループなどの活動に大きく分かれるような印象もあった。

コロナ禍では、これまで隠れていたアーティストやスタッフなどの契約、雇用の問題がクローズアップされ、状況を改善するための動きが官民一体の活動に見られた。また、アーティストの活動継続のために、大型のオペラ上演活動に対してのみならず、中小規模の活動に対する支援が国や自治体により措置され、若いアーティストたちが逆に社会に出るきっかけを掴んだことも、2022年の大きな特徴だった。大学や国内団体の付属機関の教育研究発表公演も復活してきている。それ

も、コロナ禍に翻弄されながらのことであり、関係者一丸となって、危機に対応したと言える。

そして、映像が引き続き力を持った。舞台上演の際には、舞台セットを補完し、あるいは芸術創造の領域を高めて広げた。そして配信である。確かに、費用対効果、そして上演に勝るものはないという点は、議論の余地もあるし、加速度的に展開していくとも言にくい。ただし、フライヤーやポスター、ウェブサイトに加えて、SNSなどをつうじた映像による広報活動は明らかにその力を発揮するようになった。公演を記録する際にも決定的な力を持っている。舞台と映像の各ジャンルが独自の世界を展開するだけでなく、それぞれの力を掛け合わせたときの様々な場面での化学反応をこれからも期待したい。

一方で、国際情勢もその影を落とし、実演にとって「困難な時代」を印象づけた。そんな時だからこそ、創造活動をつうじた社会への問いかけによって、舞台芸術上演の今日的意義を共有する機会も増えたのではないだろうか。

最後に日本のオペラ公演で一定の役割を果たしてきた市民の活動が、コロナ禍での制限を受けて縮小していたのが、ここにきて再開する傾向を見せていることにも言及しておこう。彼らの活動は、共演したり、指導したりするプロのアーティストたちにとっても、重要なキャリア形成の場として、日本のオペラ界を支えてきた。同時に市民という緩やかなつながりが、オペラという長い時間をかけてつくりあげる制作プロセスで実感でき、多くの社会課題を解決する手がかりや、前向きな手法ともなりうる。コミュニティのつながりに個人を引き寄せる絶好の機会でもある。この点に、音楽活動をしている人たちや企画者、行政担当者には、ぜひ気がついてもらいたい。